

ヒガンバナ（マンジュシャゲ）

牧 幸 男

9月もお彼岸の頃になると、朝夕は涼しくなり過ごし易くなる。散歩したり街道歩きには最もふさわしい季節となる。この頃、目立つ植物にユリ科のヒガンバナがある。周辺の景色が未だ緑色であるが、赤色の花卉を反り返るように咲いている姿は、よく印象に残る。我が国に生育しているヒガンバナは、染色体が基本数の3倍ある三倍体のため、結実しない。そのため土中で球根を作り株分けして繁殖してきた。遺伝的には同一遺伝子を有し、同じ地域の個体は開花期や花の大きさや色、草丈がほぼ同じように揃っているのが特徴である。生育場所は用水や田圃の土手、墓地など人間生活の周辺に多い。このような所は、普段は関心を持って眺めていなので、花が開花すると急に注目する場所となる。毎年同じ場所に咲き出すので、秋分の日頃になると前年出会った場所を注目するようになる。



ヒガンバナが咲く風景

ご年配の方なら、ヒガンバナの別名、曼珠沙華と言うと親しみが湧くと思う。昭和14年に梅木 三郎 作詞、佐々木 俊一 作曲の「長崎物語」の歌詞

赤い花なら曼珠沙華 おらんだ 阿蘭陀敷に雨が降る 濡れて泣いてる ジャガたらお春 未練な出船の ああ鐘が鳴る ララ鐘が鳴る ……

やクラシックの好きな方は明治44年に発表された北原白秋作詞、山田耕作作曲の『思ひ出』の歌曲の一節

GONSHAN GONSHAN*1 何処へゆく 赤いお墓の 曼珠沙華 曼珠沙華

今日も手折りに きたわいな GONSHAN GONSHAN 何本か 地には七本 血のように 血のように

を思い出す方もおられるかもしれない。特に、長崎物語の歌詞のジャガたらお春*2 悲運で哀れな女性の物語に心を動かされ、多くの方が口ずさんだのではないだろうか。

注*1：柳川市の方言で、「良家のお嬢さん（令嬢／娘）」のこと。

注*2：寛永16年（1639）、ジャガタラ（現ジャカルタ）へ混血という理由で流罪*3された人物である。父はイタリア人ニコラス・マリンという人物で、母親の本名は不詳だが日本人で、宗教名はマリヤでキリシタンだったことまで分かっている。

注*3：明治6年大政官布告で外国人との結婚は許可になったが、明治14年「大政官無号達」による「陸軍武官結婚条例」では陸軍武官は外国女性と結婚禁止だった。

ヒガンバナは、ヒガンバナ科の多年生草本で、特に田畑の縁に沿って列をなし花時に見事な景観となる。ラッキョウ型の鱗茎が地下にあり、外皮は黒い。秋の彼岸の頃、高さ30～40cmの茎の先端に直径10cm程の有柄の赤色の美しい花が数個輪状に開く。花が枯れると緑葉を叢生し、翌3月頃には枯れてしまう。私たちは花に注目しても、葉の様子を殆ど知らない多年草である。原産地は中国大陸と言われ、日本で帰化植物に分類されている。分布は北海道や東北地方を除く日本全国である。

渡来時期は、平安時代（794～1083）に中国からと言われているが、源 順（911～983）著『倭名類聚抄』（931～938）記録されず、伊藤伊兵衛（1676～1757）『花壇地金抄』（1695）に「蔓朱沙花 花色朱のごとく 花の時分葉なし この花何なるゆえにや 世俗うるさき名をつけて 花壇などには大方植えず」と、悪名高い植物として紹介しているのが記述の最初らしい。寺島良安編纂（1653～没年不明）編纂『和漢三才図会』（1712）には「この名は法華経の摩訶、曼陀羅華、曼珠沙華に由来す、すなわち、曼陀羅華は今でいう朝鮮牽牛花なり、曼珠沙華はこのヒガンバナ、漢名石蒜なり、摩訶は大の義なり、ともに其の美を称するのみ」と語原を記している。その他、『万葉集』（629～759）に記載がある植物の「いちし」（菴師）について、ヒガンバナではないかとの「いちし論争」もあるが、定説となっていない。



マンジュシャゲ



シロバナマンジュシャゲ



ショウキラン

類似植物に花が白色のシロバナマンジュシャゲ(シロバナヒガンバナ) *Lycoris albiflora* が生育しているが、黄色のショウキラン *Lycoris aurea* の交種と推定されている。しかし、赤い花のヒガンバナは種子作らないので交雑してできたという説明には矛盾をはらむため、赤い花を咲かせるヒガンバナが突然変異で、白色のヒガンバナが生まれた説もある。シロバナマンジュシャゲはヒガンバナに似ているが、比較すると花びらの反り返りや縁のフリルがゆるい。葉色は黄緑色で、ヒガンバナに比べると淡くて柔らかな感じがする。一方で、彼岸花が突然変異を起こして、白色のヒガンバナが生まれた可能性もあるらしい。

詩歌に取り上げられるようになったのは、渡来の時期の関係から江戸後期以降になってからが多い。

曼珠沙華 ひとくれないに 咲きたれば いやさぶしかも 故里の野は 中根貞彦

曼珠沙華 蘭に類ひて 狐鳴く 与謝蕪村

植物名の由来について、牧野富太郎博士は「彼岸花は秋の彼岸頃にこの花が咲くにより、マンジュシャゲ(曼珠沙華)は赤花を表す梵語(追記: サンスクリット語 *manjusaka* の音写)によるものである。しかし、そのものとは葉が出ない内に花を咲かせる意味で、先ず咲き、または真っ先が仏教との関係で前述の文字があてられたものであろうか。」と述べている。また、大乘仏教の重要な経典の一つ『妙法蓮華経』(成立年代不詳)等の仏典では釈迦が法華経を説かれた際に、これを祝して天から降った花(四華)のひとつが曼珠沙華であり、花姿は不明だが「赤団華」の漢訳などから、色は赤と想定され曼珠沙華は天上の花という意味もある。

この花、人間が生活している周辺に限って生育し、野生はなく1000種ぐらいの方言や異名が知られている。主な植物名を列挙すると、天蓋花、幽霊花、死人花、捨子花、金燈花、葬式花、墓花、地獄花、火事花、蛇花、剃刀花、狐花、灯籠花等いずれも陰気くさく不吉な名前が多い。恐らく、墓地に多く生育し、有毒植物というイメージによるものだろう。英語名は Red spider lily あるいは, Spider lily と呼んでいる。欧米人と日本人の花に対する感覚の違いが分かる。学名は *Lycoris radiata* で、属名はギリシア神話の海の女神 Nereus の1人である *Lycorias* の名で、花が美しいことによる。種小名は放射状の意で花蓋の形状から名付けられた。

薬用は生薬名を「石蒜」と言い、生の根をすりおろし、就寝前に両足の土踏まずにつけ軽く包帯をしておくことにより、有毒植物のため、服用を避けなくてはならない。

この植物は、古い時代に飢饉の際、飢えを救った「救飢植物」として食料に利用したので、各地に植えられたと考えられている。この事実は、第二次世界大戦中の戦時や非常時の食用とした記録から考えられる。食用にはデンプンに富んだ鱗茎を使うが、含有する有毒物質のアルカロイドのリコリンは水溶性のため、すり潰し後長時間水に晒さらさないが無害にならない。天明の飢饉の時、ヒガンバナの市が立ったという記録が残っていることから確かであろう。しかし、毒性が強いため、どの程度さらせば無毒化して安全に食べられるのかについての定説はない。

その他に、モグラなどの害獣対策として、田の畦に植栽される説、モグラは肉食のためヒガンバナとは無縁という説、エサのミミズがヒガンバナを嫌って土中に住まないために、この草の近くにはモグラが来ない説がある。

花言葉は「赤花情熱」「独立」「再会」「あきらめ」「悲しい思い出」で、白花は「また会う日を楽しみに」「想うはあなた」である。

